

[博士論文審査要旨]

申請者: 玄 幼栄

民主化文化がビッグ・データ・アナリティクスを介して組織のアジリティに与える影響

審査員 神岡太郎

福地 宏之

松井 剛

激しい環境変化の中で、企業が高いパフォーマンスを発揮するには、その変化を素早く感知して対応し新たな機会をつかむ組織的能力、つまりアジリティ(Agility)の重要性が指摘されている。産業界では、このアジリティを高めるのにビッグ・データ・アナリティクス(Big Data Analytics、以下 BDA と略す)が大きな役割を果たすと期待している。BDA とは、刻々と変化する、広大で多様な形式のデータ(主に Big Data)を分析、利用して、組織の意思決定や価値創造に結び付けることをいう。

一方、過去の研究の中には、BDA への投資が必ずしもアジリティを高めることにつながっていないという報告もある。それに対して本論文は、BDA がアジリティを高めるかどうか、組織文化、特に民主化文化(Democratization Culture)が影響しているという仮説を提示し、その 3 つの関係を実証的に分析している。組織文化とは、組織のメンバの間で共有されている価値、態度、基準、及び信念であり、その中でも民主化文化は情報の共有と多様性を重視する組織文化をいう。

本論文は 6 つの章から構成されている。第 1 章がイントロダクション、第 2 章が文献調査、第 3 章から第 5 章が実証研究、第 6 章が結論となっている。基本フレームワークは、共分散構造分析を念頭に置いて、BDA を独立変数要因、アジリティを従属変数要因、民主化文化をモデレータ要因としたモデルである。そのモデルに対して、第 3 章から第 5 章の実証研究では要因にバリエーションを与えた検証やコンストラクト開発を行っている。3 つの実証研究から得られた主な結果は次の通りである。

第 3 章では独立変数要因に焦点を当てている。アンケート調査分析では、まず独立変数要因である BDA を、Advanced BDA と Basic BDA に分け、両者がアジリティに正の影響を与えることを確認している。その上で、民主化文化は Advanced BDA とアジリティの関係には正の影響を与えるが、Basic BDA とアジリティの関係には負の影響を与えるという興味深い結果を導き出している。さらに民主化文化と比較のために集団主義文化をモデレータとして用いているが、集団主義文化は Basic BDA とアジリティの関係にのみ正の影響を与えるという結果となった。

第 4 章ではモデレータ要因に焦点を当てている。民主化文化の概念に対して、それを BDA 活用の実務へ応用しやすいように発展させたデータ民主化文化という新しいコンストラクトの開発を行っている。IT およびマーケティングマネージャーを対象としたインタビューと文献調査結果からコーディングに基づき、内容妥当性などを検証した上で、3 つの下位概念(情報共有、多様性の受け入れ、平等性)と、それに対応する測定尺度を導き出している。

第 5 章では、従属変数要因に焦点を当てている。アンケート調査分析では、まず従属変数要因であるアジリティを戦略的アジリティと運用的アジリティに分け、BDA が両者に正の影響を与えることを確認している。その上でモデレータとして前章で開発したデータ民主化文化の効果を分析したところ、BDA と戦略的アジリティの関係には正の影響を与えるが、BDA と運用的アジリティの関係には有意な

影響を与えないという興味深い結果を導き出している。

本研究は次の3点で、情報マネジメント研究としてのオリジナリティと価値が高いと考えられる。つまり1)民主化文化を実証研究モデルの中で扱ったということ、2)それがBDAとアジリティの関係に介在することを示したということ、3)その介在の仕方は単純ではなく、BDAやアジリティの種類によって異なることである。また、データ民主化文化をSecond Orderのモデルとして測定できる尺度として開発したことは、実務に対しても大きな貢献があると考えられる。

本論文には課題もある。例えば、この研究対象に対してより広い視野で組織文化の議論が不足していること、従来の情報システム研究の中でBDAがどういう位置づけにあるのかという視点からの議論が不足していることである。しかし、これらの課題は将来に解決されるべきところでもあり、本研究の価値や本論文において得られた成果そのものを損なうものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。